

平成 16 (2004) 年 1 月 30 日

日本英学史学会 広島支部

ニューズレター

No.37

平成 15 年度 第 2 回 研究例会 開催

平成 15 年 12 月 6 日 (土) 今年度第 2 回 (通算第 49 回) 例会が松江市の サンラポーむらくも を会場として開催されました。八雲会の皆様方の協力を得て、ラフカディオ・ハーンを中心テーマとした今回の松江研究例会は、広島支部例会初の山陰開催となりました。広島から約 20 名、地元から 10 数名の研究者が集い、大盛会となりました。御参加くださった皆様、開催にあたりご支援を賜った皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成 15 年度第 2 回 (通算第 49 回) 研究例会
プログラム

日時：平成 15 年 12 月 6 日 (土)
午後 1 時 30 分～午後 5 時 30 分

場所：サンラポーむらくも
〒690-0887 島根県松江市殿町 369 番地
Tel: (0852) 21-2670

会場受付 (午後 1 時～)

開会行事 (午後 1 時 30 分～1 時 50 分)

開会のことば	支部長	小篠敏明
来賓挨拶	八雲会会長	伊藤亮輔

特別講演 (午後 1 時 50 分～午後 3 時)
司会および講師紹介 風呂 鞏

「ハーン没後百年を前にして
ハーンの現代・未来へのまなざし」
小泉 凡 (島根女子短期大学)

研究発表(1) (午後 3 時 10 分～3 時 50 分)
司会 田村一郎

「ハーンのエピソード・大谷正信
子規・漱石・八雲をめぐって」
日野雅之 (松江北高等学校)

研究発表(2) (午後 3 時 50 分～4 時 30 分)
司会 田村一郎

「大学入試の中のハーン」
風呂 鞏 (比治山大学)

研究発表(3) (午後 4 時 40 分～5 時 20 分)
司会 竹中龍範

「倉田百三の外国語にふれる
「愛と認識との出発」をとおして」
野村勝美 (広島支部理事)

閉会行事 (午後 5 時 20 分～5 時 30 分)
閉会のことば 副支部長 竹中龍範

懇親会 (会場 サンラポーむらくも)

史跡見学・12 月 7 日 (日) 午前中
松江市内ハーン関係史跡見学

研究例会報告

研究例会は小篠敏明支部長の開会のことばで幕を開けました。続く八雲会会長・伊藤亮輔先生の歓迎挨拶では、「八雲会の歩み」という資料に沿って、90 年にわたる八雲会の歴史をご紹介くださいました。まさに「ミニ講演」の趣を持ったお話でした。続く特別講演、および研究発表のまとめを以下に掲載します。

今に生きるハーンの思い

小泉凡先生の特別講演を拝聴して



2004年は小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の没後100年の年にあたる。今や、愛好者による組織的活動は当地松江にとどまらず、熊本、焼津、京都、広島、など全国各地に広がりを見せ、現在も新たに会が結成され、地域に根ざしながら世界への活動を続けられているという。このような記念すべき時に、第49回研究例会において、ハーンの曾孫にあたる小泉凡先生(島根女子短期大学)による「ハーン没後百年を前にして - ハーンの現代・未来へのまなざし」と題したご講演を聴くことができたのはまことに幸せなことであった。

小泉先生のご講演は、自然との共生、異界との共生、つつましさの維持、民間伝承(伝統文化)の復活、防災へのメッセージ、クレオール文化の普及と注目、戦後日本体制への影響~ボナ・フェラーズと八雲、の7つのテーマから構成されていた。その一つ一つについてハーンの著作や講演にふれられるとともに、宮崎アニメの世界、水木しげるによる妖怪ブーム、『ハリー・ポッター』シリーズ、などにも言及され、まさに過去から現在・未来まで時空を超えた内容であった。さらにクレオール文化の普及に役立ったことや、ボナ・フェラーズ准将を通して戦後日本の方向付けに大きな影響があったことを知り、今更ながらにハーン存在の大きさを感ずるとともに、小泉先生ご自身の深い知性と感性に大きな感銘を受けたのは私だけではなかったであろう。

もとより、ご講演内容をすべてご紹介することはできないが、筆者にとって最も印象に残ったのは、「つつましさの維持 日本経済への危惧」のお話であった。日本文化を心底愛したハーンが、日本のたどるべき方向と実際にたどった方向を今から100年以上前にすでに予見し、危惧していたのは驚きであった。客観的史実から過去を辿り、現代的評価により現在をより深く見据え、さらに未来まで見通すこと、は英学史研究に共通する大切なことであろう。

小泉先生の優しい語り口を通してハーンのメッセージを聞いたような、さわやかなひとときであった。

深澤清治(広島大学大学院教育学研究科)

ハーンのエピソード・大谷正信

子規・漱石・八雲をめぐって



八雲会副会長・日野雅之先生のご発表は、俳人・繞石(ぎょうせき)として知られ、後に広島高校教授となる大谷正信の業績を紹介し、ハーンとの人間関係やハーンの俳句理解について論じたものだった。

先生のお話は、まず「薄紫の山脈」の熱唱から始まった。ご自身が広島大学で学ばれたご経験、旧知の方が江田島海軍兵学校のご出身であることなど、日野先生と広島のご縁は深い。その広島からやって来た我々を歓迎する「島根県民の歌」は、お人柄のにじみ出る「シブイ」歌声であった。

大谷正信は島根県尋常中学校でハーンに学び、ハーンが熊本五高へ転出する折には生徒代表として送別の英語スピーチを行った。仙台の二高を終えて東京帝国大学英文科へ入学したとき、ハーンが熊本五高より赴任。再び教えを受けることになる。苦学生であった正信は、ハーンの日本文化資料収集係として報酬を受け、それを学資として卒業することができたという。

卒業後は英語教師として各地で教鞭を取るが、その間、「恵馬遜(エマソン)傑作集」の翻訳出版、2年間の英国留学、句集や随筆集の出版などを行う。大正13年から昭和7年まで広島高等学校教授を務めた。大谷正信はハーン作品の翻訳を精力的に進め、『小泉八雲全集』(第一書房)を出した。

彼とハーンの親交と断絶、ハーン俳句理解、そして夏目漱石との関わり(漱石が亡くなったのは、繞石が送った土産を食べたから!)など、日野先生はとても愉快的語り口で様々なエピソードをご紹介くださった。広島英学とハーンを結びつける上で非常に重要な、また大変興味深いご発表であった。

馬本勉(広島県立大学)

ハーンの心とは？

風呂鞆先生の発表を拝聴して



初の松江大会にふさわしく、ハーン研究を続けておられる風呂先生が高校英語教師としての経験を基に「大学入試のハーン」というタイトルで研究発表をされた。

大学入試を控えた高等学校の英語教育界では、今までハーンの存在は大きかった。高校・大学の求める英語学力・教養とハーンとの関連について、以下に示す英語参考書等の中で大学入試に出題されたハーンの作品を分析された。

- ・原 仙作著『英文標準問題精講』（旺文社、昭和37年改訂版）
「極東の将来」、「読書論」- 2問、「人生と文学」、「文学と輿論」からの原文が5問採用されている。

大学生としての自覚と矜持を持たせる内容である。

- ・山崎 貞著『新々英文解釈研究』（研究社、昭和33年改訂第一版）

“Haru” (KOKORO)、 “The Story of Chugoro” (KOTTO)からの引用文。

日本の再話文学が出題されたのはアメリカでハーンの全集が出版されたことが背景。

- ・CHIAKI HIGASHIDA: “SELECT ENGLISH PASSAGES” (35元社、昭和32年、広島高等師範学校英語科卒業生が寄稿者)

“The Story of Kwashin Koji” (A Japanese Miscellany)が載っている。

ハーン東大時代の教え子たち（小日向定次郎等）が広島にてハーンの文章のすばらしさを学生に伝えた伝統が引き継がれている。

戦後の国語教科書に載るハーンの作品は昭和36年を節目として減少している。また、原文が英語教科書に紹介された例も、文英堂発行“UNICORN

ENGLISH COURSE ”(1985)の“On Poetry”などを除くと少なくなっている。

そうした中、昭和61年度東京都立大学の入試問題にハーンの人物像に関するエッセイが出題された。これは、受験生がハーンについて興味を持つ機会が増えるなら、より豊かな大学生活樹立に貢献できるのではないかとの意図から出題されたものとして評価できる。

ハーン生誕150周年の平成12年7月に風呂先生が发起人となり広島で立ち上げられた「ラフカディオ・ハーンの会」のメンバーは皆「ハーンの残して呉れたものの中には、今も宝石の如く人生の英智が歴然と存在する」との確信と共に、ハーンの虜になっている。そんな中、100年以上前の古き良き時代の日本を瞥見したハーンは、現代のこの世相を予期できただろうか。「心の教育」の必要性が叫ばれている現代の学校教育の現場においてハーンが伝えたかったであろう「古き良き日本の心」を私たちは謙虚に学び、そうした機会を次世代に提供してゆくべきではなかろうか。

ご発表の中で『小学新国語六年下』（光村図書、昭和48）を紹介されたが、あの教科書は松江大会前にノートと共に我が家で発見された。それらから私自身、小学生時代にいかにハーンに感動していたか、その様子が思い出され、いかに児童期に受ける教育の影響が大きいのか、その責任の重みを痛感した。

鉄森令子（大日本ランゲージクラブ）

倉田百三の外国語にふれる

「愛と認識との出発」をとおして



本発表は、倉田百三と英学との関わりを追究しておられる野村勝美先生（元広島市立基町高等学校）が、百三が20歳代に発表した感想・論文をまとめた「愛と認識との出発」に現れた外国語の分析をとおして、百三の外国語力の実態を探ろうと試みられたものであった。

すでに三次中学校在籍中、校友誌の「競点英文和

訳」において第一等を獲得するという実力を持っていた百三が、本作品においてみせた「日本語で文章を書くとき、外国語がスラスラと頭に浮かんで、日本語と混在していった側面」を分析することによってその外国語力が窺えるというのが本発表の基本的立場である。この作品に用いられた外国語は、英・独・仏・羅・希・葡語にわたり、出現度数は語・句・文のレベルを合わせて、延べ 1400 有余にのぼっている。うち、固有名詞を除く 1100 余りの中で、英語は 760 を数えて 7 割に及び、ドイツ語が 329 とこれに次いでいる。このデータを基に、これだけの外国語を日本文中に混在させるについては、当然、文法上の無理も生ずることになるが、それを敢えて行ったのは、百三の外国語理解の深さ (extent) によるものであり、その原書理解力は、外国語を日本語に置き換える機械的レベルをはるかに凌いでいたと分析され、これに基づいて、「百三は 20 歳代初め頃には我が国の精神文化に影響を及ぼすに足りだけの外国語理解力を身につけていたと言えよう」と結論づけられている。

ただ、外国語力なるものをどう捉えるかによって、本発表において採られた分析法については、いろいろな意見が出されるところであろう。ここに拾い上げられた外国語のレベルや、それが属する範疇・分野の分析が的確になされることが必要であろうし、英学史研究の観点からは、結論に述べられるような事例、すなわち、百三がこのように外国語を直に日本語文章中に用いたことによつていかなる影響が残されたのか証するものが求められよう。この辺りのことを拡充・整理され、ぜひ論文にまとめていただくようお願いしたい。

竹中龍範 (香川大学)

例会は竹中龍範副支部長のことばで閉会となり、続く懇親会、翌日のハーン関係史跡見学も非常に充実したものとなりました。



史跡見学のコース

「ぐるっと松江 堀川めぐり」 松江郷土資料館 (興雲閣) 小泉八雲記念館 小泉八雲旧居 月照寺 (解散)



2 日間にわたる松江研究例会の開催にあたり、八雲会の皆様には多大なるご支援ならびにお心遣いを賜りました。改めて御礼申し上げます。

日本英学史学会広島支部役員会報告

松江研究例会に先立ち、12月6日(土)正午より午後1時まで支部役員会が開催されました。出席者は13名。議題および協議内容は以下の通りです。

(1) 支部活動の活性化について

小篠支部長より、広島支部を「中四国支部」としたい旨提案があり、この検討を始めることの是非について協議した。「広島という軸を保ちながら、より幅広い活動へ」という趣旨説明を受け、すでに広島県内の活動に限定されていないという現状を踏まえ、制度面や会費の問題、英学史と英語教育史という学問分野の棲み分けなどを含め、活発な意見交換がなされた。協議の結果、中四国支部へ向けての検討を始めることについて、了承が得られた。

(2) 支部財政について

松岡理事(会計担当)より、今年度すでに赤字になっているとの報告があり、ここ数年の傾向として、活動の活発化に合わせて支部会計の残高が減ってきているとの指摘がなされた。着実な紀要発行や充実した例会の開催など、活性化に伴う支出増を前向きに捉え、今後収入を増やす方向で検討に入りたいとの提案があり、議題(1)の問題と合わせて継続審議とした。

(3) 研究活動の活性化について

馬本事務局長より、約8年前に松岡理事によって立ち上げられたホームページを発展的に継続し、情報発信を続けているとの報告がなされた。ホームページの情報から松江研究例会のことを知り参加した方がいるなど、インターネットが活性化のきっかけとなる例が紹介された。

(4) その他

小篠支部長より、松江研究例会において特別講演をお願いした小泉凡先生(島根女子短期大学)を、慣例に従い、支部の顧問としてお迎えしたいとの提案があり、了承された。また、松江での例会開催にご尽力くださった築道明先生(島根大学)には、広島支部理事として加わって頂きたいとの提案があり、了承された。

顧問の寺田芳徳先生より、広島支部顧問でいらしゃった神鳥武彦先生が平成15年6月にご逝去されたとの報告があり、支部設立にあたってのご功労を偲ぶお話があった。

<<広島支部ニュース>>

『英學史論叢』原稿募集

『英學史論叢』第7号の刊行に向けて、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。研究論考、英學史隨想、英學史時評、書評等、多数のご応募をお願いいたします。送り先は事務局まで。締切は平成16年3月22日(月)消印有効です。詳しくは以下の執筆要領をご参照下さい。なお、標準書式については、『英學史論叢』第6号p.35の図をご参照ください。

『英學史論叢』執筆要領

・『英學史論叢』に載録するものは研究論考およびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。

・研究論考、その他のものとも、提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれもB5判用紙を用い、上下左右に2.0~2.5cm程度の余白をとった完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいたものは受理しないことがある。

・研究論考は日本英學史学会広島支部研究例会、日本英學史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。

・研究論考は参考文献・資料・図版等を含め、8ページ以内とする。

・その他のものについては、英學史隨想、英學史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英學史学会広島支部会員の著書ならびに広島支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英學史隨想、英學史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として2ページ以内とする。

『英學史論叢』標準書式

・『英學史論叢』投稿原稿は別に定める執筆要領に従うものとするが、さらに次の書式に従うことが望ましい。

・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。

・本文の文字の大きさは9ポイントないし10ポイントとし、1行あたり38文字、1ページ38行を標準とする。

・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18~20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。

・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴチとするか、下線を施して見やすくする。

・注は脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。

・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。

会費の納入について

平成15年度分の会費を未納の方は、同封の郵便局の振込用紙にてご納入くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。(すでに今年度分を納入頂いている方には同封しておりません。)行き違いがございましたらご容赦ください。平成16年度分の会費納入につきましては、次号にてご連絡いたします。

日本英学史学会（本部）の動き

日本英学史学会報 No.102 号が発行されました（2004年1月1日）。No.99より巻頭言として掲載されている「史に聴けば」は英学史研究にまつわる味わい深いエッセイ。これまでに、(1)「お粥の英語か乾飯の英語か」(茂住實男会長)、(2)「『英学史』ルネッサンス 学際的学問の度量」(庭野吉弘副会長)、(3)「私にとっての再出発」(小玉敏子副会長)と続いてきましたが、第4回となる今回の号では、竹中龍範先生による「『百聞は一見に如かず』 果たして然りや」が掲載されています。英学史研究にいつもついて回る固有名詞の読み。「英文鑑」や「同人社」などの読みを巡る論考は大いに参考になりました。そう言えば松江例会での研究テーマのひとつ、大谷正信。俳号の繞石(ぎょうせき)の読みを「じょうせき」や「にょうせき」とした書物もあるようです。(固有名詞は難しい!!)

同じく日本英学史学会報 No.102 の「英学史手帖」では、昨年度から今年度にかけて広島で開催された2つの催しが松村先生によって紹介されています。一つは広島高等師範学校設立100年記念シンポジウム。パネリストとして提案された寺田芳徳先生の「高師の教え」は、昨年尚志会より発行された『高師の思い出』に収録されています。二つめは、旧制広島高等学校創立80周年を記念したイベント。昨春秋に広島市立中央図書館で開催されました。

もうひとつ。馬本勉「ホームページ探訪(3) 電子ライブラリ巡り」も上記学会報に掲載されました。詳しくは広島支部のホームページからご覧ください。夏目漱石ライブラリやラフカディオ・ハーン・データベースなど、インターネット上の膨大な資料を探索する「窓口」を紹介しています。

日本英学史学会は今年、創立40周年を迎えます。記念の全国大会は10月30日(土)~11月1日(月) 早稲田大学を会場として行われます。

<<広島英学史の周辺>> 例会で松江を訪ねたときに、能海寛(のうみ・ゆたか)研究会副会長の岡崎秀紀先生から膨大な研究資料を頂きました。島根県金城町に生まれ、広島の進徳教校、そして慶応義塾に学んだ能海は、仏教を世界に広めることを志し、英語を熱心に学んだといひます。チベットに渡ったまま消息を絶ち、二度と日本の土を踏むことのない彼の遺品の数々は、金城町の歴史民族資料館に展示されているそうです。その中には、彼の英文日記や、ナショナルリーダーの翻訳を筆写したものが含まれているとのこと。ぜひ一度、例会で伺いたいものです。 広島県比婆郡口和町

教育委員会の方より、元大谷大学教授(倫理学)・世良寿男(せらかずお)氏が使用したと思われる英語教材を数点お預かりしています(旧家から発見されたそうです)。Swinton's Reader、Kambe's Spelling-Book、ユニオン第4読本直訳、ダイヤモンド英和辞典などのほかに、広島高等師範学校・栗原教授の英文学史の講義を筆写したと思われる自筆のノートがあります。世良寿男氏は広島高師を卒業した後、福岡の小倉中学で英語を教えていたようです。もう少し調査が進みましたら、何らかの形でご報告したいと思います。元日本英学史学会会長・速川和男先生から、第7回東日本支部大会でご発表されたハンドアウト「翻訳者としての Glenn W. Shaw」を送って頂きました。平易な英語で日本情緒をたっぷり伝えるショーの英文。倉田百三『出家とその弟子』を世界に広め、ドイツ語、フランス語訳を生むきっかけとなったのが、彼の英訳でした。英学に関わる本の紹介(再び)。川又一英『麻布中学と江原素六』新潮新書2003。幕末時代に洋学を修めた江原は、小学校英語や学校教育への教科書導入に力を入れ、後に麻布中学校の初代校長となります。この本の筆者川又氏は、かつて竹鶴政孝の一生を描いた『ヒゲのウヰスキー誕生す』を書いています。竹原の造り酒屋に生まれた竹鶴は、大正時代にスコットランドでウヰスキー製法を学び、後にニッカの創業者となります。忠海中学時代から英語が得意で、従兄との文通にも英語を使ったという竹鶴の学習歴や、英国での留学生生活を調べることもまた、広島英学史の一断面に迫る研究になるでしょうか。ほとんど個人的な「研究覚え書き」となってしまったこの欄。皆様からの「英学史の断片情報」をお待ちしています。次回の研究例会は5月下旬を予定しています。広島支部の通算第50回となる記念の例会。詳しくは次号(4月発行予定)にてお知らせします。まだまだ寒い日が続きます。お身体に十分お気をつけください。今年も皆様とともに英学史研究に邁進したいと思います。40周年を迎える日本英学史学会と同年の私、まだまだ若輩者ですので、今後ともご指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします。(馬)

日本英学史学会広島支部ニューズレター No.37

2004年1月30日発行

発行 日本英学史学会広島支部(代表 小篠敏明)
事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562

広島県立大学経営学部英語研究室内(馬本 勉)

電話&FAX: (08247) 4 - 1725 (馬本研究室直通)

e-mail: umamoto@bus.hiroshima-pu.ac.jp

日本英学史学会広島支部ホームページ

<http://www.hiroshima-pu.ac.jp/~umamoto/eigaku/>
